

家族は共に時間を過ごしているか
：公的／私的領域の意味論

○品田 知美 (早稲田大学)

ひとりの男性が公的空間に出て稼ぎ手となり女性が私的空間で家事と育児を担う“近代家族”は、日本社会にどこまで存立しえたであろうか。家族と労働の形態のみに着目したとしても、広がりや戦後も緩やかであった。1960年代半ばごろであっても子どものいる家族のうち仕事をしている女性は半数を超え、大半が自営業あるいは小規模家族経営の従業者として働いていた。その後女性の仕事先はパートや非正規雇用へと置き換わっていったが、専業主婦のいる家族が全域化したことはかつてない。そうなると家族はいつどのように公的／私的領域が分離したといえるだろうか。

はじめに、2000年代以降の小学生のいる親たちの生活時間を確認しておきたい。産業化した社会にあつて、性別役割分業のもと子どもを中心として構成員が強い情緒的関係性によって集団を形成している核家族。すなわち、もともと家族の近代性を観察しやすい対象を選び日常の時間／空間共有に関する輪郭を素描するためである。男性は仕事に出向き、女性は仕事に加えて大半の家事・育児をする時間配分のありようは過去数十年にわたり頑なに変化を拒んでいる。男性はさらに仕事時間を増やし家族と空間共有をし難くなってきているなかで、数分は家事や育児に時間を上乗せした。いっぽう女性は子どもと関わる時間を急速に増やし、炊事や衣類の管理に割く時間を減らしている。仕事+家事・育児、つまり総労働時間は女性と男性でほとんど差がない。

つぎに、日常で家族が時間と空間を共有する象徴的行為である食事について現状を整理しておきたい。小学生の子どもがいる家族が全員で食卓を共有する割合は、平成期を通じて全体としては減少しつづけてきたが、2000年代に入ると共稼ぎで年収が低めの家族では上昇傾向もみられた。朝夕どちらも共食する割合は女性が正規雇用されている場合および自営業や家族従業者は高く、男性稼ぎ主型家族とみられるパートや無職の場合に低い。つまり逆説的に形態として“近代家族”的であるほうが食卓を共にしていない。

では、早期に産業化が進展しいわゆる“近代家族”が数多く観察され、広く理念として浸透したと考えられる社会の1つイギリスと比較すると日本はどうみえるか。小学生の子どもがいる女性に対する2カ国のインタビュー調査によると女性の多くが仕事をしている点では共通していたが、性別役割分業はイギリスでは衰退し調整は男性と女性双方がするものとなっている。毎日小学生に送迎を必要とするイギリスではさらに親の働き方に制限がかかるため、普段から仕事を家に持ち帰るなど私的とされる空間にも公的なものは入り込んでいた。けれども共働きかどうかにかかわらず、夕食という時間には全員が共に同じ空間に集い家族が会話しながら過ごすことが重視されているという意味で、子どもを中心とした情緒性や集団性がうかがえた。離婚の多いイギリスではこのような家族でないと持続していないともいえよう。

それに対して、日本では全員が共に同じ空間に集い家族が会話しながら過ごす時間は重視されていない。平日の夕食時に家族と共に食事をしている男性はいないにもかかわらず、もっと家族と過ごしたいと思っている女性は例外的な存在であった。また、子どもも夕食時に塾や習い事に出ていることが多く、家族それぞれが空間を共有することなく別の場所で過ごしている時間が長い。なお、家族の近代性の特徴の1つとされる社交の衰退とプライベートの成立という側面からも顕著な相違点がある。日本の家族は空間に家族以外の大人を迎え入れる機会が極端に少ない。友人家族や親族などを招いて集まる機会は減多につくられず、時折子どもの友人が来るか祖母など親族が訪れるのみである。このような家族の関係性の違いはリビングという空間のつくりかたに差をもたらしていた。日本の家のリビングは長時間を過ごす母と子のための空間になる。父の短い家族空間への滞在時間とは母と子にとってまるで非日常であるかのようだ。他方イギリスの家のリビングは家族全員が集う場であると同時に定期的に近しい関係にある成人を招き外部を時折取り込むための空間である。そこに時折子どものグッズが這い込んでも定期的に位置を占めることのない家族と親密な人々が集う空間となっている。

家族の関係性の差異からは、公的／私的領域の意味における社会の多様性が示唆される。コロナ禍において家族が1つの空間に閉じられた時、なにが生じるであろうか、最後に議論をしたい。

キーワード： 生活時間 子育て イギリス